



かわもと あいいちろう  
**川本 愛一郎** さん

1958年3月25日生まれ  
水俣病患者家族。父はチッソ水俣病患者連盟委員長の川本輝夫氏（1999年死亡）。

劇症で亡くなった祖父のことや子どもの頃の生活、支援者として水俣病患者をリードした父とその運動を支えた母を語る。

作業療法士・言語聴覚士として介護施設を経営。

2008年5月から水俣病資料館の「語り部」となる。  
水俣市出月在住

水俣病は病気ではありません。チッソが起こした傷害殺人事件です。そのチッソと闘ったのが、私の父である川本輝夫です。

日本では憲法25条と13条によって人は誰でも生きる権利、幸せになる権利が認められています。でも水俣病の患者さん達は、その権利を奪われました。

チッソはメチル水銀は毒だとわかっていたのに工場廃水と一緒に流しました。そこが川本輝夫が一番許せなかったところでした。

当時の不知火海はとても豊かな海でした。漁師さん達は恵まれた環境の中で、穏やかに豊かな暮らしを営んでいました。

私の祖父は劇症型の水俣病で亡くなったのに、水俣病とは認定されませんでした。周りにもひどい症状があるのに申請しない人が沢山いるということを知った父は、仕事から帰ってくると、私が乗っていた子供用の自転車で患者さんの家を一軒一軒周り始めたのです。そして、チッソを相手に自主交渉を始めました。ちょっと東京に行ってくると、東京のチッソ本社に座り込みに行ってから1年9ヶ月の間、父は家に帰ってきませんでした。

水俣病は本来、家庭の団らんである食卓から起きました。健康になるために、赤ちゃんに少しでも栄養を与えたいと魚を食べた。その事が症状を重くしました。

父は、67歳の時、癌で亡くなりました。

「熱意とは 事ある毎に 意志を表明することに他ならない」これは、父の遺言です。

私の現在の仕事はリハビリテーションです。人間らしさの回復といわれています。川本輝夫がした事も、同じ事だと私は思っています。

【写真；幼い頃、ご両親との記念写真】